

第3節 「共生型ネット社会」への期待

1 ソーシャルメディアの国民生活への浸透等によりもたらされる変化

前節でみたように、ソーシャルメディアには様々な効用が認められるが、その利用が進み、国民生活に浸透した場合、どのような社会を展望できるだろうか。

まず、ソーシャルメディアをはじめとするICTの利活用が人と人とのつながり、絆の形成、個人の不安の解消、地域コミュニティの問題の解決等にどのような影響を与えるかについて、ソーシャルメディアに着目し、分析を行った。

●ソーシャルメディアの利用を若年層が牽引。利用者は多様な目的のためにソーシャルメディアを使い分け

その結果、ソーシャルメディアの利用者の約6割が複数のソーシャルメディアを利用していた。また、若年層ほど複数のソーシャルメディアを利用し、SNS、Twitter、ミニブログの利用率が高く、モバイル端末でのソーシャルメディア利用が一般化しており、ソーシャルメディアの利用を牽引していた。同時に、ブログは世代を問わず利用され、地域SNSは高齢層に多く利用されるなど、世代による利用の特徴が明らかになつた。

また、利用者は、多様な目的のためにソーシャルメディアを使い分け、既存の知人とのコミュニケーションのためにSNSを、知りたいことについて情報を得るためにTwitterを、同じ悩みごとや相談ごとを持つ人を探すためにブログを利用しているとの結果が得られた。

●ソーシャルメディアは、人と人との協働を媒介し、諸問題を解決。また、身近な不安や問題を解決し、人と人が支え合うためのツールとしても活用

また、ソーシャルメディアは、人と人との協働を媒介し、諸問題の解決という形で実社会にプラスの影響を与えていた。

さらに、ソーシャルメディアが、人と人との絆を深め、現実社会の身近な不安や問題を解決し、人と人が支え合うためのツールとして活用されていた。

●今後、リアルサイバーの連携がさらに進行、利用者が主体となったICT利活用や、ICTが媒介するモノ等のシェアの動きも進展

ここで、今後の通信放送ネットワーク環境を展望すると、第1節で述べたとおり、現在、ICTが自然に社会に溶け込み、人と人、人とモノ、モノとモノをN対Nで媒介するユビキタス環境が整備されてきているが、今後、さらに、M2M通信が普及し、あらゆるモノがネットに接続されることにより、リアル空間とサイバー空間の連携が強化される進化したユビキタスネットワーク社会が実現すると考えられる。また、1対Nを基本とする放送網、1対1を基本とする通信網に加えて、N対Nを基本とするソーシャルメディアが有機的・相互補完的に組み合わされ、各ネットワークやメディアの特性を活かしつつ、各利用者のニーズに応じて自由に連携可能な環境になっていくと考えられる。

また、今後のICT利活用の変化を展望すると、集合知を活用した商品・サービス開発等、供給者側ではなく利用者が主体となったICTの利活用が急速に進むと考えられる。さらに、昨今、モノ、サービス、情報をシェアする動きがあるが、ICTは、その媒介、マッチング機能で、その動きを促進してゆくだろう¹。

2 「共生型ネット社会」への期待

(1) 「共生型ネット社会」の展望

●「主体となる人と人とが支え合い、国民の幅広い層の包摂を実現し、ICTが人と人との協働を媒介し、諸問題の解決等により価値創造をする進化したユビキタスネットワーク社会」として「共生型ネット社会」を構想

上述したソーシャルメディアに関する諸分析や今後のネットワーク環境やICTの利活用の変化の方向性等を踏まえ、ソーシャルメディアの利用が進み、国民

生活に浸透した場合にもたらされるICT社会像を整理すると、「主体となる人と人とが支え合い、国民の幅広い層の包摂を実現し、ICTが人と人との協働（コラボレーション）を媒介し、諸問題の解決等により価値創造をする進化したユビキタスネットワーク社会」と特徴付けることができ、このような特徴を有するICT社会を「共生型ネット社会」と呼ぶことができるだろう。

¹ モノのシェアを基盤としたビジネスは昔から存在するが、ICTを活用した代表的なものとして、ジップカー（Zipcar カーシェアリング会社）、スレッドアップ（thred UP 子供服の交換サービス仲介会社）、エツツイ（Etsy 手作りのものやヴィンテージもののシェアを仲介する会社）等が挙げられる。所有から利用との流れでは、クラウドサービスも挙げられよう

●ソーシャルメディアの持つポテンシャルを最大限に引き出し、負の側面を最小化し「共生型ネット社会」を実現するために、将来にわたり継続的な取組が必要

「共生型ネット社会」は、上述した肯定的な各要素で特徴づけられるものであるが、ソーシャルメディアの分析等からは、対処すべき課題も見出された。

例えば、個人情報漏えい、個人情報の不正使用、プライバシーの侵害等個人情報に関する不安を現在のソーシャルメディア利用者の多くが感じており、また、個人情報を知られたり、悪用されることを懸念し、未利用者がソーシャルメディアの利用をしないことが明らかになった。

また、ソーシャルメディアの普及によって、N対Nの情報流通が一般化し、個人の情報発信やネットを介しての連携が可能となる反面、情報が溢れ、信頼性の高い情報、適切な情報を選別できない懸念もある。

さらに、今後、ソーシャルメディアの利用が進み社会に普及するにつれて、我々の生活に影響を与え、対応を迫られる問題が、予期せぬ問題も含め生じることもあるだろう。

ソーシャルメディアの持つポテンシャルを最大限に引き出し、その利用に伴う負の側面を最小化するためにも、利用に伴う様々な論点について、現在又は将来にわたって議論を重ね、技術的な対応、社会的な合意

(2) 「共生型ネット社会」への期待

●ソーシャルメディアをはじめICTの利活用を進め、「共生型ネット社会」の実現をめざす中、ICTが不安の解消、人と人との支え合い、国民の幅広い層の包摂を実現することが期待される

これまで、過去、現在を振り返った上で、ソーシャルメディアのポテンシャルが大きいことを確認し、ソーシャルメディアの利用が進み、国民生活に浸透した場合にもたらされるICT社会像として、「共生型ネット社会」を構想した。

「共生型ネット社会」は、ソーシャルメディアをはじめとするICTが自然に社会に溶け込み、サイバー空間でのつながりやICTの利活用を、不安の解消、人と人との支え合い、国民の幅広い層の包摂等の形で実社会につなげている社会、又はそれらの実現が期待される社会⁴といえる。換言すれば、社会に溶け込んだICTの恩恵が国民に幅広くひびき、国民が生活の豊

形成等の取組を継続的に行う必要があろう。

例えば、既に問題として顕在化している個人情報に対する懸念を払しょくすることは、ソーシャルメディアによる人と人の交流を安心・安全に行うため不可欠であり、その普及や発展にも影響を与える重要な要因であるが、技術面での取組を行うこと²のみならず、サービス提供時の個人情報の取扱いについて社会的合意を形成すること³、各人が、自ら享受したい利益やリスクの程度に応じて自らの個人情報を提供するスキルを取得すること等多角的な取組が必要であると考えられる。

本年の白書では、ブロードバンドの普及等が本格的に始まった約10年前から現在までの変化を振り返り、ICTの利活用を更に進め、利用者本位の豊かな社会を実現するために残されている課題について分析を行った。過去を振り返ってみても、インターネットやブロードバンドの利用が一般化する過程で、個人情報への懸念、違法・有害情報、迷惑メール等予期せぬ問題も生じ、中には大きな社会的な問題となったものもあるが、事業者、利用者、行政等関係者の間での議論を尽くし、技術的対応、社会的合意形成、法的対応等様々な対応を着実に行ってきた。総じていえば、ICTは我々の生活にプラスの変化をもたらし、我々はICT利用の恩恵を享受しているといえるだろう。

かさを享受することができる社会ということもできるだろう。

上述した課題に対する取組を利用者本位で行い、また、ソーシャルメディアの利用に伴い将来顕在化しうる問題について適宜適切に対処を行うことにより利用に伴う負の影響を最小化し、「共生型ネット社会」の実現をめざす中、ソーシャルメディアをはじめとするICTの恩恵を国民が十分実感できるようにしなければならない。

特に、被災という出来事を経験した日本で、人と人との支え合い、地域と地域との支え合い、絆の再生、形成、身近な不安の解消、地域コミュニティの問題解決等が求められる現在、「共生型ネット社会」の実現をめざし、ICTが、支え合い、絆の再生、形成、身近な不安の解消、地域コミュニティの問題解決等に貢献していくことが強く求められている。

² 現在、個人識別を極めて困難とする匿名化技術の研究等が進められている

³ ウェブサイトの閲覧履歴、購買履歴、位置情報等ログを活用したサービスを利用者の不安感、不快感なく提供すべく、様々な議論がなされている

⁴ ICTにより社会の幅広い層を包摂する取組として、例えば、現在、脳波通信、マルチモーダルインターフェース（音声認識、ジェスチャーインターフェース等五感の組み合わせによるインターフェース）等の研究が推進されている。諸外国でも同様の問題意識での取組が進められており、EUでは、「eインクルージョン」（2006年公表）の①すべての人々のICT利用促進、②高齢化施策、③デジタルリテラシー向上、④少数民族・移民の包摂、⑤過疎地等の福祉向上、⑥電子政府推進の6項目を、「デジタルアジェンダ」（2010年公表）で継承し推進している。具体例に、AAL-JP（Ambient Assisted Living Joint Programme）では、高齢者の生活の質的向上を図るため、①衣服に織り込まれたウェアラブル・ボディー・センサーで高齢者の健康状態を把握、②一人暮らしの高齢者が転倒して身動きが取れなくなるような状態を神経形態学的画像センサーによりリアルタイムで検知するなどのプロジェクトを推進している

みんなでつくる情報通信白書コンテスト2011

小・中学生の部 優秀賞受賞コラム

私とじょうほう未来～じょうほう未来がきせきをかなえる～

執筆 星下 瑞穂さん (福岡雙葉小学校 2年(当時))



コメント：私の考えたじょうほう未来で、たくさんの人たちにきせきがおとずれ、笑顔につつまれた未来を
そうぞうして書きました。

私のおじいちゃんは体がふ自由でいつもねています。私たちがりょ行に行く時はびょう院でおるす
ばんです。おみやげ話しをしてピクリとも笑いません。

おじいちゃんはきせきを信じているそうです。いつか、朝、パチッと目がさめたら、昔のように元
気に歩ける。

私はおじいちゃんのきせきのお手伝いをしたいと心から思いました。どうしたら笑顔でお話しが出来
るかひっしで考えました。

さいしょに、3Dメガネのようなきかいが入ったゴーグルをつけます。
それにはナビやストリートビューがついています。かんこうビデオのようにきめられたえいぞうがな
がれるのではなく、自分の行きたい場所の景色が映ります。行きたい方向に目をうごかすとすすみます。
たとえば、右にすすみたい時は目を右にうごかします。後ろにもどりたい時は目をつぶると、その時
間の分だけ後ろに下がります。そして、えいぞうに映っているお店でネットはん売と同じ方ほうでお
買いものが出来ます。数日後にたくはいびんでおみやげがとどきます。

次に、歩いているとかんじる方ほうです。両足に空気でふくらんだブーツのようなものをはきます。
これをはくとむじゅう力と同じように足がふわっとかるくなり、自分がすすんでいる方こうのえいぞ
うに合わせてブーツがうごきます。

さいごに、言ばが上手にしゃべれないおじいちゃんがみんなにおみやげ話しをする方ほうです。
おじいちゃんが見た景色は全てろくがされていて、そのメモリーカードをテレビに入れるとえいぞう
が映ります。

私たちはそれを見て、おじいちゃんが今、本当に行きたい所を知ることが出来ます。
そして、後日とどくおみやげを見ておじいちゃんが私たちに何を伝えたいのか知ることが出来ます。
おじいちゃんのりょ行のおみやげでもりあがっている私たちを見て、きっとおじいちゃんはほっぺを
ゆらゆらうごかして、大きな口を開けて笑ってくれると思います。

たくさんの人たちにきせきがおとずれ、笑顔につつまれた未来が来る日がまちきれないです。